

やさしい

デザインの

理論 68

土木と景観——シビックデザイン

京都市立芸術大学 美術学部 デザイン科 教授 藤本英子

1 土木分野における景観の位置付け

1) 「土木工学」での景観の捉え方

国土の多くを司る土木分野は景観においても、その影響を多く握る分野です。昭和30年代後半から東京大学ではその研究が始められたとされますが、土木学会では1983年に土木計画研究委員会に景観分科会が発足しています。筆者が独立してこの分野のデザインを手がけたいと活動を始めた1980年代最後に、土木建築家の篠原修氏が「シビックデザイン」という呼び方を始め、1991年に建設省がシビックデザイン導入宣言を示しました。そこででの定義は「地域の歴史・文化と生態系に配慮した、使いやすく美しい土木施設の計画・設計」でした。高度経済成長時代には、まず作ることに焦点を当てた「標準設計」での計画が、バブルの時代を迎えて、お金をかけられる計画になった時、目先の派手さを求めたり、過剰とも言える装飾的なデザインが生まれてくることに対する懸念もあったのではないかと考えます。

研究分野としてはこの土木の分野での景観研究の裾野は広く、学術名では「景観工学」と呼ばれています。

2) 景観を大きく司る世界

土木は英語でCivil Engineeringと呼びますが、まさに「市民のための工学」です。私たち人間の周りの景観のベースは、この分野がデザインしていると言っても過言ではありません。地域のベースをコントロールする「地形」のデザインに始まり、森林、緑地、土地利用計画に至り、そこに個々の広場、道路、鉄道、橋、トンネル、堤防、護岸、そしてダム

を計画するに至ります。いわば、景観全体を考えると、もともとの土地の地形を、どう活かすかというスタート地点から、地形の上に移動のためにどう道路や鉄道を引いていくのか。森林においては、自然保護や林業、農業など産業のために、どう計画していくのか。河川においては流れる川を、どうコントロールしていくのか。海浜においても海との境界線をどうコントロールしていくのか。景観デザインのために、自然を活かすも殺すも、この分野のデザインにかかっているとも言えるのです。ただ、そこには景観デザインがまずあるのではなく、治水や防災、産業振興など、地域と共にどう生きるかという計画と、地域と共に考える必要のある総合的な視点が求められます。

このように、景観デザインに大きな影響を及ぼす土木分野は、そのスケールの大きさだけでなく、公的なデザインで、地域性を配慮する必要があり、そして長期の視点が求められるデザイン分野となっています。また、建築デザインなどとともに、構想から計画、設計、施工、そして維持管理まで、トータルに考えるデザイン分野です。

今回は、景観デザインにおいて膨大な関わりを持つ土木分野の中でも、2では「道路」、3では「河川」、そして4では「橋梁」を中心に具体的な景観デザインについて記します。

2 分野別の景観から——道路景観

1) 道路景観（高規格道路を中心として）

私たちの日常生活に一番密着した景観デザイン分野が道路です。土木分野の中でも裾野が広く、幅広